

「荒津地区」の石油タンク群から一変して「横浜地区」の団地群が現れる。多彩な景観が密接につながっているのも博多湾の特徴だ。



福岡のシンボリックな景観となっている「シーサイドももち」には、斬新なデザインの高層ビルが空に向けて垂直に伸びる。



海、緑、まちが 立体的に調和する シンボリックな景観

博多湾水際ウォッチング—西部

10:40 博多漁港を出ると荒津大橋を境に眺めも一変。西公園の小高い緑の丘と海沿いを走る都市高速をバックに石油タンク群の光景が広がる。この荒津地区は昭和45年に竣工し162基もの石油タンクが立ち並ぶ。国内の港から運ばれてくる石油や重油は1年間におよそ430万トンにもおよび、この荒津地区を経由して福岡都市圏はもちろんだ。九州各地に届けられるのだ。メタリックで重厚なタンク群がときれるやいなや、明るい砂浜が西へと延び、人々の暮らしがかいま見える横浜地区

の団地が現れる。石油基地、砂浜、人々の生活の場。海沿いには性格の違う多彩な景観が密接につながっていた。
10:50 西に向かうにつれ、今まではなかった光景が開けていく。福岡ドーム、シーホークホテル&リゾート、ソフトリサーチパークをはじめとするオフィスビル、福岡タワー、さん斬なデザインの高層ビル……。そんなシーサイドももちのビル群と沿うように木々と白い砂浜が弧を描く。人工海浜を導入した水際空間には文化施設や情報発

空へ向かって垂直に伸びる高層ビル、ゆるやかな曲線を描く巨大なドーム、近代的な建物が海辺を飾る。シーサイドももちが代表する西部地区は福岡のシンボリックな景観としてすっかりおなじみだ。

都市機能を備えた海辺空間に人々が集い暮らす。

博多湾の新しい姿を描いたウォーターフロントがここにある。



「小戸ヨットハーバー」や「小戸公園」など緑と海が一体となった心地よい空間が広がる。



「西福岡マリナタウン」や「シーサイドもち」の前に続く砂浜。後方には道路や高層ビルなど都市のさまざまな施設が密集している。彼方に見える緩やかな山並みが印象的だ。

信基地、観光スポット、さらには約3000世帯の家族が暮らすマンション群など一つの都市が築かれている。川橋「やつぱり」この景色は今までも全然違いますよね。私は佐賀の出身で、シーサイドもちもちは2、3度しか足を運んだことはなく親しみはあまり感じていませんでしたが、こうして海から眺めると「あー、わたしの知っていた福岡だ」という気持ちがわいてきます。

出口「ええ。今まで見てきた水平的な景観に対して、シーサイドもちちは垂直方向に高層ビルが伸び、福岡のシンボリックな景観となっているんですよ」

11:00 シーサイドもちちから室見川を隔てると、白い砂浜を前に高層の新しいマンションビルが建ち並ぶ。堤防に腰掛ける釣り人や海辺を散歩する老若男女の姿などどかなシーンが展開する。この西福岡マリナタウン地区は自然と都市機能を兼ね備えた海辺都市といえるだろう。

11:10 さらに西へと進む船。右手には能古島、博多湾の西側の景観を構成する一つのポイントになっている。緑で覆われた島のふもとには家々が集まり、海沿いには漁船が浮かぶ。島の音らしが読み取れるようだ。左手には西福岡マリナタウン地区の隣に位置する、日本最大級の規模を誇るマリナー・マリノアが見えてきた。

11:15 海辺に沿って整備された散策道、岩壁に茂る緑、入江に浮かぶたく

さんのヨットのマスト。小戸ヨットハーバーを含む小戸公園一帯は海と自然をうまく取り込み、心地よい景観を作り出している。公園を過ぎると生の松原の海岸線が続く。白い砂浜と松原と海がつくりだす情緒ある自然海岸。博多湾がまた別の顔をのぞかせる。

11:25 船は方向転換し東へ向けてスピードを上げた。人の手が加えられていない能古島の西側は荒々しい自然がそのまま残る。自然林から続く絶壁には波が打ち寄せる。能古島の北側に志賀島が重なるように見えてくる。海岸線には再び西福岡マリナタウンやシーサイドもちちのまちなみが現れる。砂浜、緑、高層ビル：その後方には山並みがつつすらと浮かび上がる。絶え間なく行き交う車、空を横切るジェット飛行機、海上を自由に飛び回るかもめ…。博多湾からの景観は海と都市が調和する福岡を印象づけてくれた。

11:40 船はシーサイドもちちに浮かぶマリゾンの渡船場へ到着。参加したメンバーたちはそれぞれに福岡の海への思いを語った。

